鹿 病 防 第 １ １ 号
令和２年５月29日

各関係機関の長　殿

鹿児島県病害虫防除所長

令和２年度病害虫発生予察情報について

このことについて，発生予報第３号（６月）を発表したので送付します。

鹿 児 島 県 病 害 虫 防 除 所

〒899-3401
南さつま市金峰町大野 2200
℡099-245-1081（代表）
099-245-1157（直通）
099-245-1149（FAX）

テレホンサービス
鹿児島　099-296-6430
296-6431

ホームページアドレス：http://www.jppn.ne.jp/kagoshima

メ ー ル ア ド レ ス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農 薬 安 全 使 用 五 つ の 柱

１.使用する人の安全　使用者自身の健康管理，安全使用
２.作物に対する安全　適期，適正防除で薬害防止
３.農産物に対する安全　消費者へ安全な農産物を供給
（農薬安全使用基準の遵守）
４.環境に対する安全　周辺環境への影響防止
（周辺住民等への危被害防止）
（河川，湖沼，海などへの汚染防止）
（養蚕，養蜂などへの危被害防止）
５.保管管理の安全　保管管理の徹底で事故防止

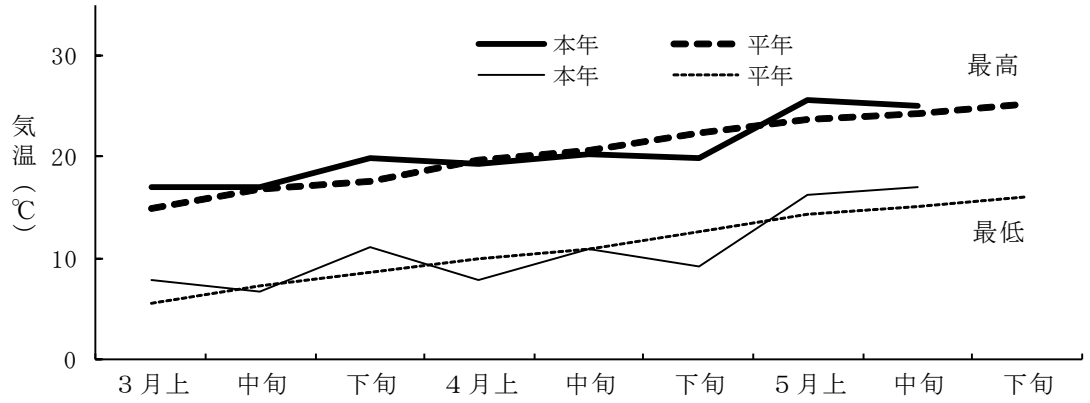
農薬ラベルを確認しましょう。
農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう。

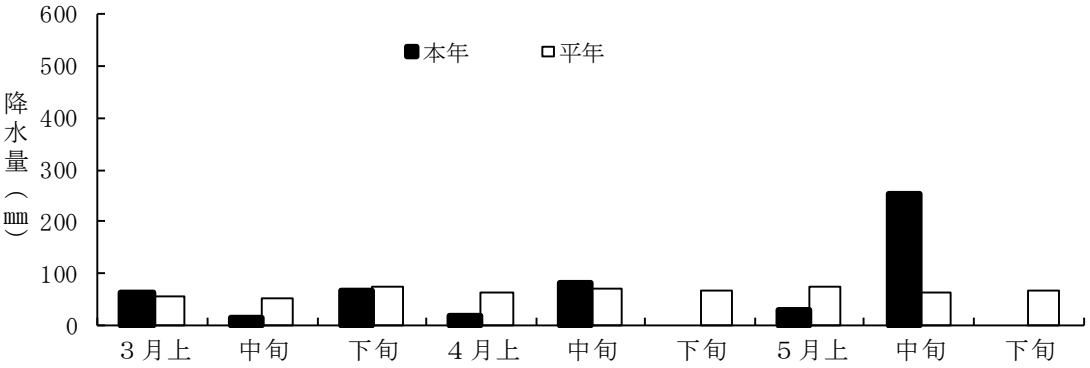
【気　象　概　況】

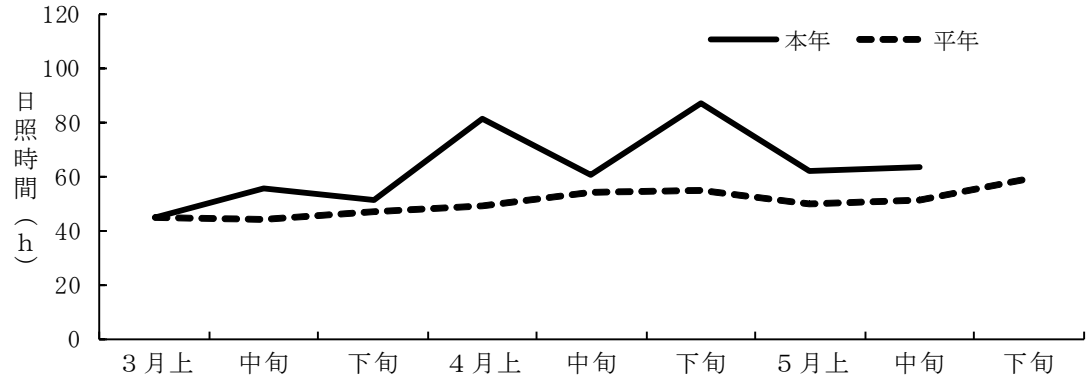
Ⅰ．向こう１か月の予報（５月30日から６月29日）　令和２年５月28日　鹿児島地方気象台 発表

要　素	地　　域	確　率　（％）			概　　要
		低い(少ない)	平　年　並	高い(多い)	
気　　温	九　州　南　部	１０	２０	***７０***	九州南部では，気温は高く，降水量は平年並みか多く，日照時間は平年並みか少ない見込み。奄美地域では，気温は高く，降水量，日照時間はおおむね平年並みの見込み。
	奄　美　地　方	１０	２０	***７０***	
降 水 量	九　州　南　部	２０	***４０***	***４０***	
	奄　美　地　方	***４０***	３０	３０	
日照時間	九　州　南　部	***４０***	***４０***	２０	
	奄　美　地　方	３０	３０	***４０***	

Ⅱ．３～５月の気象情報（鹿児島地方気象台　観測点：加世田）







【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
普通作物	早期水稲	いもち病	やや少	やや少
		紋枯病	並	並
野菜	イチゴ	うどんこ病（県本土）	並	並
		ハダニ類（県本土）	やや少	並
花き	キク（施設）	ハダニ類（県本土）	並	やや多
		アザミウマ類（県本土）	並	やや多
果樹	カンキツ	かいよう病（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃　（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	やや少	並
		〃　（奄美地域）	並	並
	ナシ	黒星病	並	並
		アブラムシ類	多	多
茶樹	チャ	炭疽病	並	並
		輪斑病	やや少	並
		もち病	並	並
		チャノコカクモンハマキ	並	並
		チャハマキ	やや少	やや少
		チャノホソガ	やや少	並
		チャノミドリヒメヨコバイ	やや多	やや多
		チャノキイロアザミウマ	少	やや少

【病害虫発生予報】

Ⅰ．普通作物

1．早期水稲

（1）いもち病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県内全域

（イ）発 生 量　　やや少

イ　予報の根拠

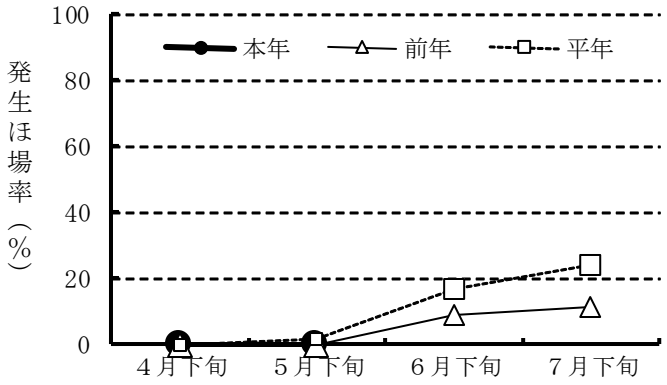
（ア）調査結果　発生量：やや少

発生ほ場率０％（平年２％）

：やや低い（－）

（イ）気象予報

降水量：平年並みか多い（＋）



いもち病の発生ほ場率（早期水稲）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）葉いもちの発生が穂いもちの発生につながりやすいので，早期発見に努め，発生を認めたら直ちに防除を行う。

（イ）出穂期が梅雨期間にあたるので，常発地では粒剤による予防散布が効果的である。

（ウ）穂いもち防除は穂ばらみ後期に行うが，時期を失しないよう注意する。

（エ）窒素質肥料の多用は発生を助長するので，各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。

（2）紋枯病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県内全域

（イ）発 生 量　　並

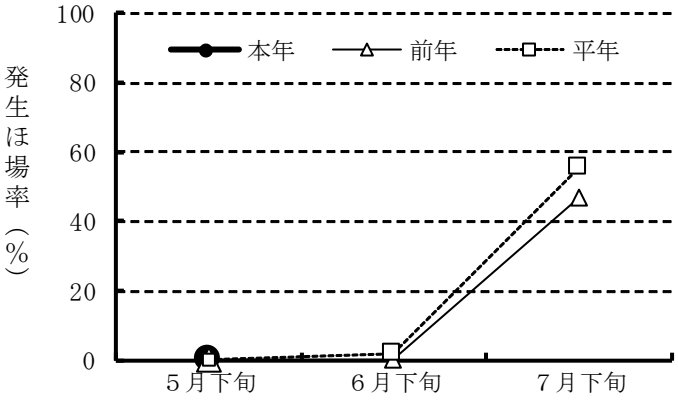
イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：並

発生ほ場率０％（平年０％）：並

（イ）気象予報

気温：高い（＋）



紋枯病の発生ほ場率（早期水稲）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）防除は上位葉鞘への進展期にあたる出穂１週間前から出穂期頃に行う。

（イ）窒素質肥料の多用は発生を助長するので，各地域の栽培暦に準じた適正な施肥管理に努める。

（ウ）過繁茂状態の水田では，発生が認められたら病勢の進展に注意する。

（エ）前年に多発した水田では特に注意する。

（３）海外飛来性害虫の飛来状況

ア　セジロウンカの初誘殺日

（ア）予察灯　　５月17日（平年：５月24日）

（イ）大型吸引トラップ　　５月10日（平年：５月30日）

イ　トビイロウンカの初誘殺日

（ア）予察灯　　５月16日（平年：６月28日）

ウ　コブノメイガの初誘殺日（フェロモントラップによる調査は2018年から開始）

（ア）フェロモントラップ　５月20日（2018年：６月20日，2019年：５月29日）

エ　予察灯および大型吸引トラップへのウンカ類の初誘殺日は平年に比べて早い。また，フェロモントラップへのコブノメイガの初誘殺日も2018年および2019年に比べて早い。

オ　ウンカ類およびコブノメイガの初誘殺日が平年に比べて早いので，海外飛来性害虫の誘殺状況は病害虫防除所のホームページで確認し，本田の見廻りを行い発生に注意する。

表１　予察灯(60W白熱電灯)でのウンカ類の誘殺状況（農業開発総合センター内：(水田)）

月/日	4/1～5/9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
ｾｼﾞﾛｳﾝｶ	0	0	0	0	0	0	0	0	**5**	**3**	0	0	0	0
ﾄﾋﾞｲﾛｳﾝｶ	0	0	0	0	0	0	0	**1**	0	0	0	0	0	0
月/日	5/23	24	25	26	27	28	29	30	31	6/1	2	3	4	5
ｾｼﾞﾛｳﾝｶ	0	0	0	0	0									
ﾄﾋﾞｲﾛｳﾝｶ	0	0	0	0	0									

注）予察灯でのウンカ類の調査は４月１日から開始。

表２　大型吸引トラップでのウンカ類の誘殺状況（農業開発総合センター内）

月/日	4/1～5/9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
ｾｼﾞﾛｳﾝｶ	0	**1**	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ﾄﾋﾞｲﾛｳﾝｶ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月/日	5/23	24	25	26	27	28	29	30	31	6/1	2	3	4	5
ｾｼﾞﾛｳﾝｶ	0	0	0	0	0									
ﾄﾋﾞｲﾛｳﾝｶ	0	0	0	0	0									

注）大型吸引トラップでのウンカ類の調査は４月１日から開始。

表３　フェロモントラップでのコブノメイガの誘殺状況（農業開発総合センター内：(水田)）

月/日	5/1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
ｺﾌﾞﾉﾒｲｶﾞ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月/日	5/16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
ｺﾌﾞﾉﾒｲｶﾞ	0	0	0	0	**1**	0	0	0	0	0	0	0			

注）フェロモントラップでのコブノメイガの調査は５月１日から開始。

Ⅱ．野　菜

１．イチゴ（苗床）（５月調査は令和元年から）

（１）うどんこ病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　並

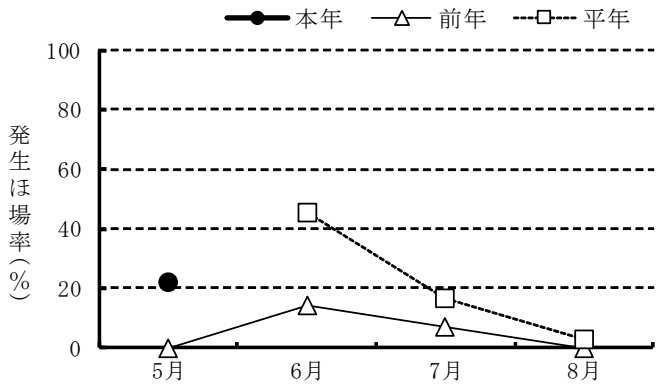
イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：並

発生ほ場率22％

平均発病株率９％：やや低い（－）

発生程度の高いほ場を認めた（＋）



うどんこ病の発生ほ場率（イチゴ苗床）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）本病が発生しやすい葉裏をよく観察し，早期発見と初期防除に努める。

（イ）雨よけ育苗施設では発生が多くなる傾向にある。

（ウ）発病葉や古葉は除去し，ほ場外へ持ち出して処分する。

（エ）ランナー切り離し前までの防除を徹底し,葉裏や下位葉に薬剤が十分かかるよう散布する。

（オ）薬剤によっては感受性が低下している可能性があるので，散布後は防除効果を確認する。

（カ）同一系統薬剤の連用を避け，系統や作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

（２）ハダニ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　並

イ　予報の根拠

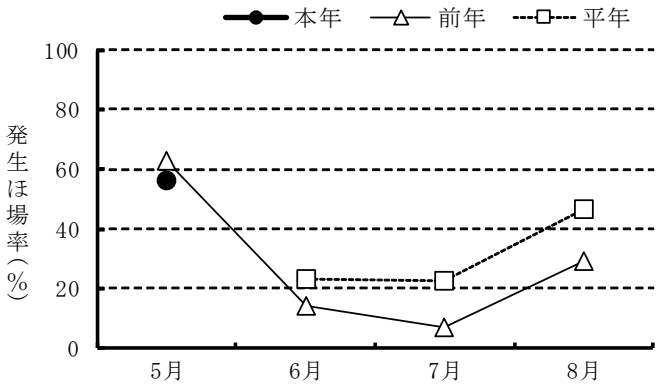
（ア）調査結果　発生量：やや少

発生ほ場率56％

平均寄生株率10％：やや低い（－）

（イ）気象予報

気温：高い（＋）



ハダニ類の発生ほ場率（イチゴ苗床）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）下葉や寄生葉は摘葉し，ほ場外に持ち出し処分する。

（イ）薬剤の防除効果を高めるため，下葉かきを行ってから葉裏に十分かかるよう散布する。

（ウ）薬剤によっては感受性が低下しているので，散布後は防除効果を確認する。

（エ）同一系統薬剤の連用を避け，作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

Ⅲ．花き（キク）

（１）ハダニ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土（施設）

（イ）発 生 量　　やや多

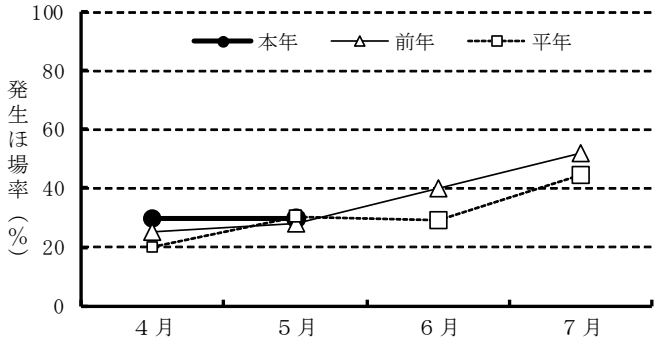
イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：並

発生ほ場率30％（平年30％）：並

（イ）気象予報

気温：高い（＋）



ハダニ類の発生ほ場率（県本土 施設）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生する場合が多いので，ほ場全体をよく見回り，早期発見と初期防除に努める。

（イ）ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し，適正に処分する。

（ウ）薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。

（エ）同一系統薬剤の連用を避け，作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

（２）アザミウマ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土（施設）

（イ）発 生 量　　やや多

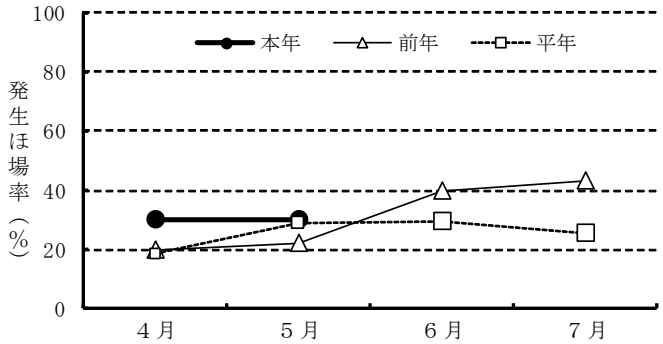
イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：並

発生ほ場率30％（平年30％）：並

（イ）気象予報

気温：高い（＋）



アザミウマ類（被害葉）の発生ほ場率（県本土 施設）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）アザミウマ類はキクえそ病(ＴＳＷＶ)，キク茎えそ病（ＣＳＮＶ)を媒介する。

（イ）母株や苗の導入に際しては，アザミウマ類の寄生やウィルス感染に細心の注意を払う。

（ウ）ハウスの開口部には目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。

（エ）ハウスの開口部等に青色粘着トラップを設置し，早期発見と初期防除に努める。

（オ）除草等の環境整備を行うとともに，母株の防除を徹底する。

（カ）同一系統薬剤の連用を避け，作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

（キ）栽培終了後は，速やかに残渣を処分する。

Ⅳ．果　樹

１．カンキツ

（１）かいよう病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県内全域

（イ）発 生 量

県本土・熊毛地域(果実)　　並

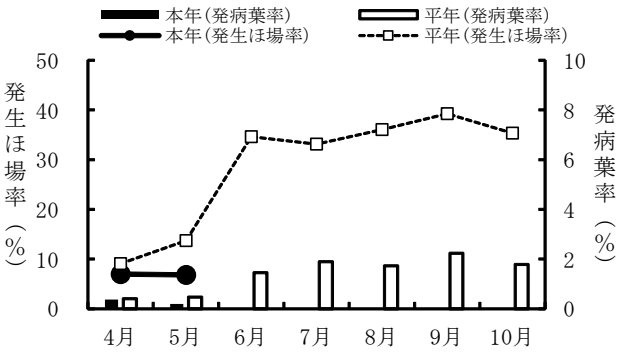
奄　美　地　域(果実)　　並

イ　予報の根拠

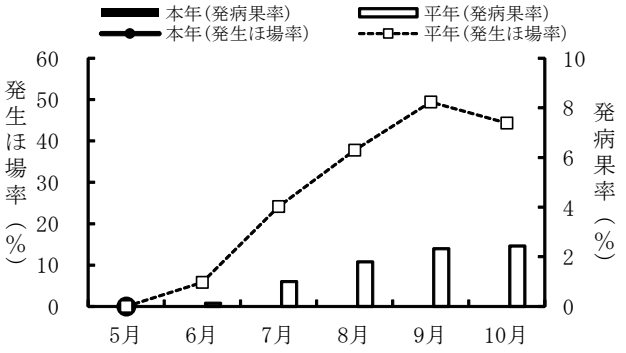
＜県本土・熊毛地域＞

（ア）調査結果

	春葉	果実
発　生　量	やや少	並
発生ほ場率	７ ％（平年 13%）：やや低い（－）	０％（平年０％）：並
発　病　率	0.2%（平年0.5%）：やや低い（－）	０％（平年０％）：並



かいよう病の発生ほ場率と発病葉率
（春葉,県本土・熊毛）



かいよう病の発生ほ場率と発病果率
（果実,県本土・熊毛）

（イ）気象予報

気　温：高い（＋）

降水量：平年並みか多い（＋）

＜奄美地域＞

（ア）調査結果

	春葉	果実
発　生　量	少	並
発生ほ場率	０％（平年 20%）：低い（－）	０％（平年 ０％）：並
発　病　率	０％（平年0.3%）：やや低い（－）	０％（平年0.1%）：並

（イ）気象予報

気温：高い（＋）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので，ミカンハモグリガの防除を徹底する。

（イ）梅雨期の強い風雨による風傷害で発生が多くなるため，梅雨期前に防除を行う。

（２）ミカンハダニ

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県内全域

（イ）発 生 量

県本土・熊毛地域　　並

奄　美　地　域　　並

イ　予報の根拠

＜県本土・熊毛地域＞

（ア）調査結果(春葉)　発生量：やや少

発生ほ場率 12%（平年19%）

：やや低い（－）

寄 生 葉 率1.2%（平年2.5%）：やや低い（－）

（イ）気象予報

気温：高い（＋）

＜奄美地域＞

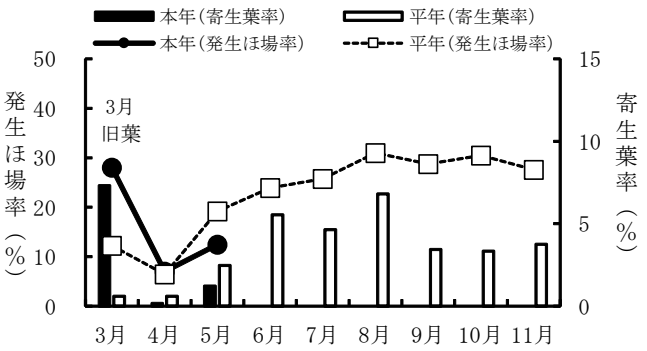
（ア）調査結果(春葉)　発生量：　並

発生ほ場率０%（平年　３%）：並

寄 生 葉 率０%（平年0.2%）：並

（イ）気象予報

気温：高い（＋）



ミカンハダニの発生ほ場率と寄生葉率
(春葉,県本土・熊毛)

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）１葉当たり雌成虫数0.5～1.0頭（寄生葉率で30～40%）を目安に防除する。

（イ）薬剤抵抗性が発達しやすいので，春期～夏期にかけては，マシン油乳剤（97%）を主体とした防除を行う。

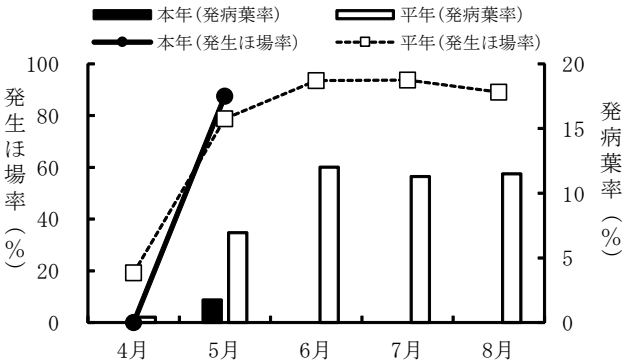
２．ナシ

（１）黒星病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　並



黒星病の発生ほ場率と発病葉率(葉)

イ　予報の根拠

（ア）調査結果

	葉	果実
発　生　量	並	並
発生ほ場率	88%（平年 79%）：やや高い（＋）	88%（平年 72%）：やや高い（＋）
発　病　率	1.8%（平年6.1%）：やや低い（－）	2.3%（平年7.2%）：やや低い（－）
発 生 程 度	低い（－）	低い（－）

（イ）気象予報

降水量：平年並みか多い（＋）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）防除は新梢伸長期までを重点に，約10～14日間隔で予防散布を行う。なお，薬剤散布は天気予報に留意し降雨前に行う。

（イ）耐性菌の発生リスクが高まるので，同一系統薬剤（ＳＢＩ剤等）の連用を避け，作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

（２）アブラムシ類

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　多

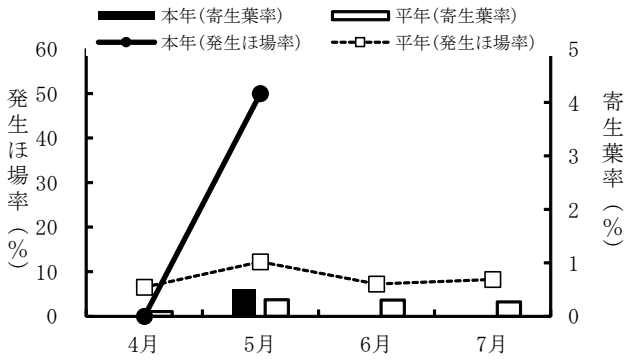
イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：多

発生ほ場率 50%（平年12%）

：多い（＋）

寄生新梢率0.5%（平年0.3%）：並



アブラムシ類の発生ほ場率と寄生葉率

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）園地によって発生量に差がみられるので,発生状況をよく把握して防除を行う。

（イ）薬剤散布が遅れると縮葉して十分な防除効果が得られないので，早期防除を心掛ける。

防除に関する今月の留意事項

１．カンキツ

（１）黒点病

ア　本病は落花直後～梅雨期に感染が多くなる。

イ　薬剤散布間隔は，散布からの累積降水量250～300mmを目安とする。

ウ　伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し，せん定くずは園外に持ち出して処分する。

（２）ゴマダラカミキリ

ア　成虫は５月下旬から発生し，６月上旬～中旬が羽化最盛期になる。

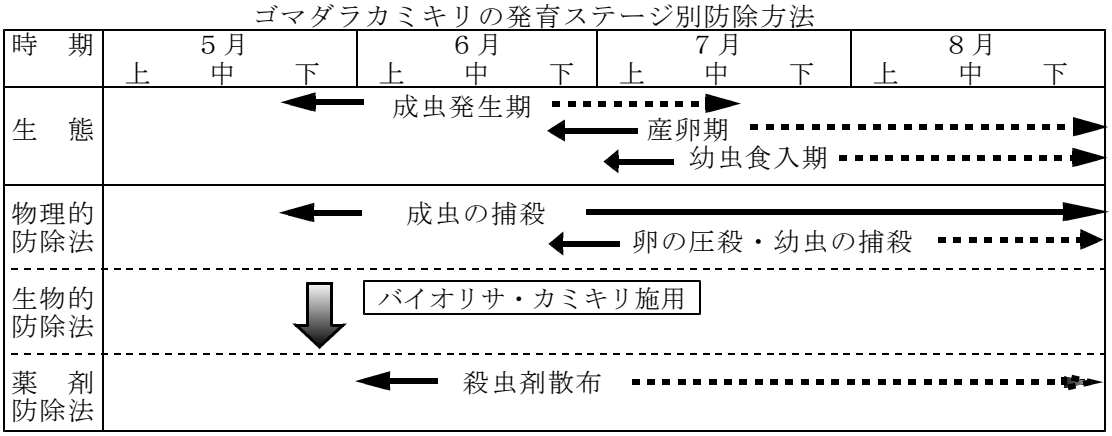
イ　産卵は６月中旬頃から始まり７月上旬が盛期で，８月まで続く。

ウ　朝夕，成虫の活動がにぶい時間帯に捕殺する。卵・幼虫の圧殺・刺殺の効果は確実である。

エ　樹冠下の除草は，産卵防止に効果的である。

オ　幼木の主幹地際部を物理的に遮断（ストックカバー法）すると，成虫の産卵を防止できる。

ゴマダラカミキリの発育ステージ別防除方法



注）県本土の発育ステージを示す。

２．ナシ

（１）果樹カメムシ類（詳細は「令和２年度技術情報第２号（果樹カメムシ類）について」を参照）

ア　予察灯での誘殺虫数が５月第２半旬から急増し，チャバネアオカメムシ，ツヤアオカメムシとも平年より多い（図１）。各予察灯での最新の誘殺虫数はホームページ（http://www.jppn.ne.jp/kagoshima）を参照。

イ　果実が吸汁被害を受けると奇形果となる。

ウ　有袋栽培では，早めに袋かけを終える。

エ　飛来を認めたら直ちに防除し，薬剤は比較的残効の長いネオニコチノイド系薬剤または合成ピレスロイド系薬剤を選択する。合成ピレスロイド系薬剤は，ハダニ類の発生を助長する可能性があるので，散布後はハダニ類の発生に注意する。

オ　防除にあたっては，薬剤の使用回数や使用時期に注意する。

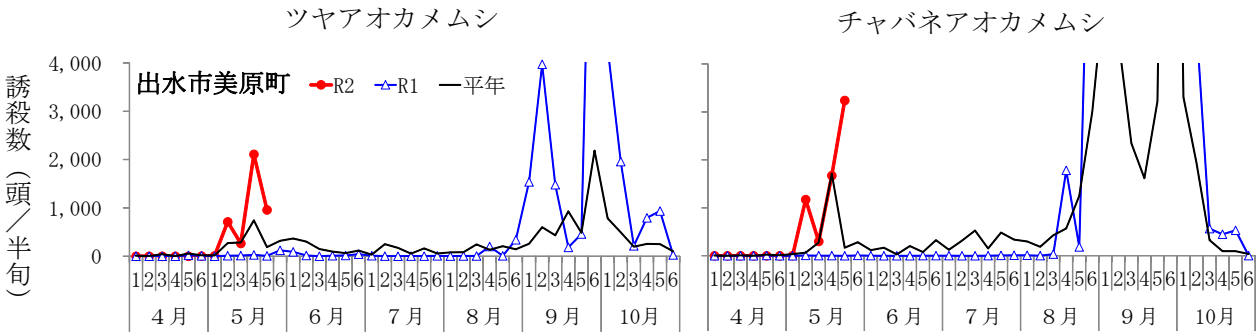


図１　出水市美原町の予察灯での果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

Ⅴ．茶　樹

（１）炭疽病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　並

イ　予報の根拠

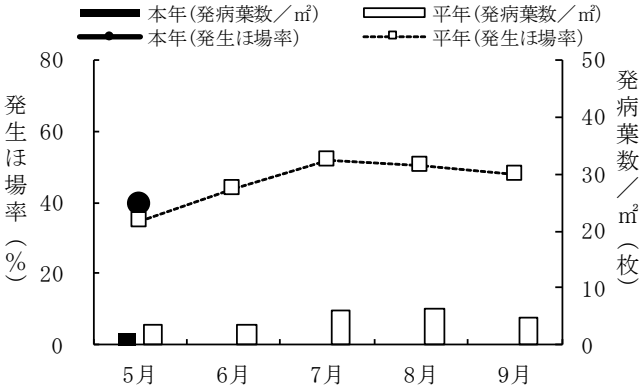
（ア）調査結果　発生量：並

発生ほ場率39％（平年35％）：並

１㎡当り病葉数2.0枚（平年3.5枚）：並

（イ）気象予報

降水量：平年並みか多い（＋）



炭疽病の発生ほ場率と発病葉数

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）摘採残葉での発生に注意し，発病葉の多いほ場では二・三番茶生育初期の防除を行う。

（イ）二・三番茶芽の上位葉は収穫されるが，摘採残葉として残る下位１～２葉を守るために萌芽～１葉期に予防防除を行う。

（ウ）二・三番茶の生育期に降雨が続く場合は，感染・発病に十分注意する。

（エ）「やぶきた」等の本病に弱い品種は発生に注意する。

（オ）二・三番茶期は，萌芽から摘採までの期間が短いので，薬剤の使用時期（摘採前日数）に注意する。

（カ）多発状態の続く茶園では整・剪枝（深刈り等）により伝染源を除去する。

（２）輪斑病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　並

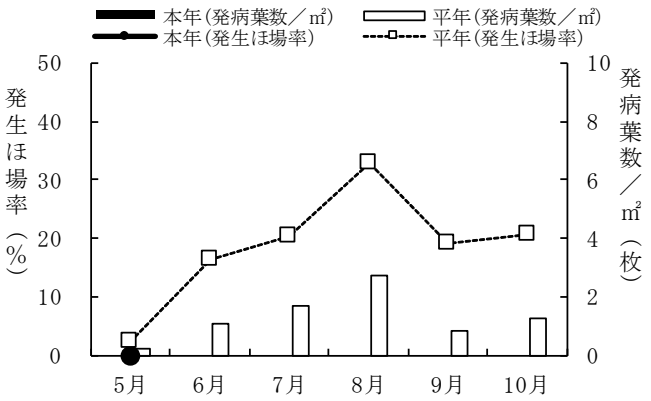
イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：やや少

発生ほ場率０％（平年２％）

：やや少（－）

１㎡当り病葉数０枚（平年0.2枚）：並



輪斑病の発生ほ場率と発病葉数

（イ）気象予報

気　温：高い（＋）

降水量：平年並みか多い（＋）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）二番茶の摘採期に降雨が多い場合は，感染・発病に注意する。

（イ）防除薬剤に保護殺菌剤を使用する場合は摘採直後に，浸透移行性の薬剤を使用する場合は摘採３日後までに散布する。

（ウ）摘採直後に防除できなかった場合は，摘採７日後までに整枝または刈番茶を摘採し，その直後に防除を行う。ただし，降雨時はできるだけ摘採や整枝を行わない。

（エ）ストロビルリン系薬剤耐性菌の発生が確認されている地域では，本系統薬剤の使用を避け，未発生の地域でも使用は年１回とする。

（３）もち病

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　並

イ　予報の根拠

（ア）調査結果　発生量：並

発生ほ場率０％（平年２％）：並

１㎡当り病葉数０枚（平年0.02枚）：並

（イ）気象予報

降水量：平年並みか多い（＋）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）発病葉の多い茶園では，三番茶生育初期に炭疽病との同時防除を行う。

（イ）多発生すると摘採葉中に病葉が混入し，製茶品質の低下をもたらすので，早めに摘採し，被害を回避する。

（ウ）常発園では風通，採光を良くする。

（４）チャノコカクモンハマキ，チャハマキ

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　チャノコカクモンハマキ　　並
　　チャハマキ　　やや少

イ　予報の根拠

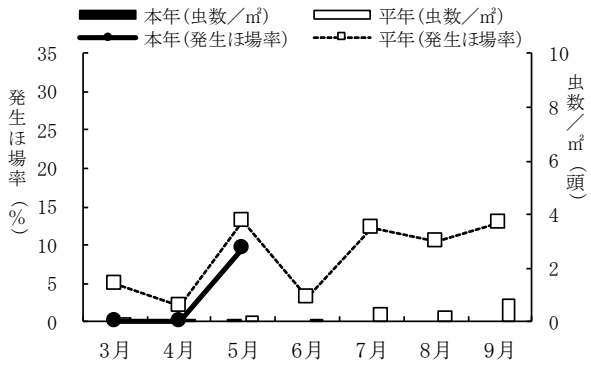
（ア）調査結果（チャハマキの越冬世代誘殺数は３月第１半旬～５月第４半旬の合計）

	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
【巡回調査】		
発　生　量	並	やや少
発生ほ場率	10％(平年 13％)：並	７％(平年 13％)：やや低い(－)
虫数(１㎡当たり)	0.1頭(平年0.2頭)：やや少（－）	0.1頭(平年0.3頭)：少（－）

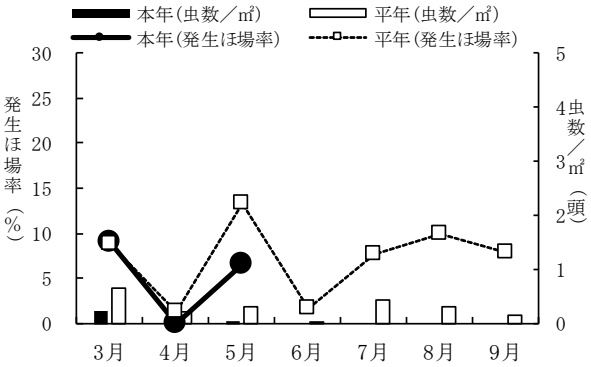
ウ　防除上注意すべき事項

（ア）薬剤防除を行う場合，防除適期はふ化～２齢期（発蛾最盛日の７～10日後）である。

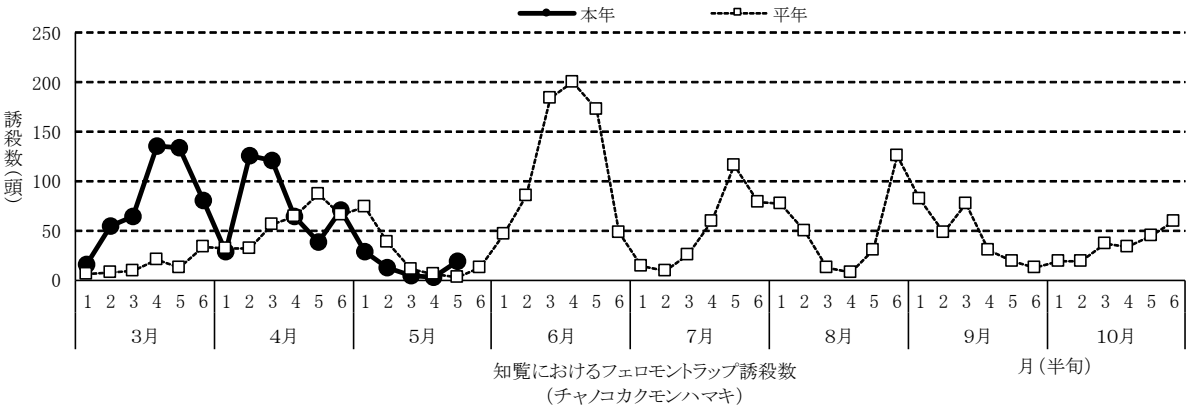
（イ）摘採との関係で，適期防除ができない場合は，摘採後早めに防除を行う。



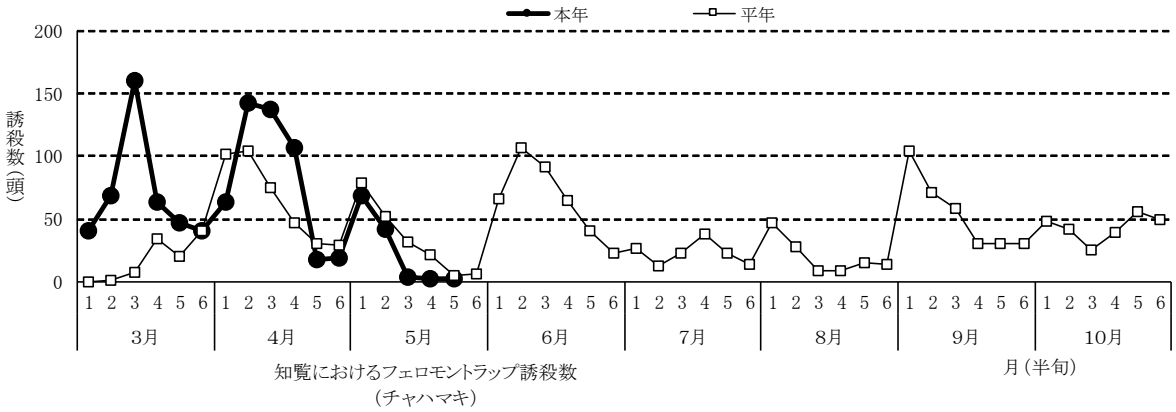
チャノコカクモンハマキの発生ほ場率と虫数



チャハマキの発生ほ場率と虫数



知覧におけるフェロモントラップ誘殺数
(チャノコカクモンハマキ)



知覧におけるフェロモントラップ誘殺数
(チャハマキ)

（５）チャノホソガ

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　並

イ　予報の根拠

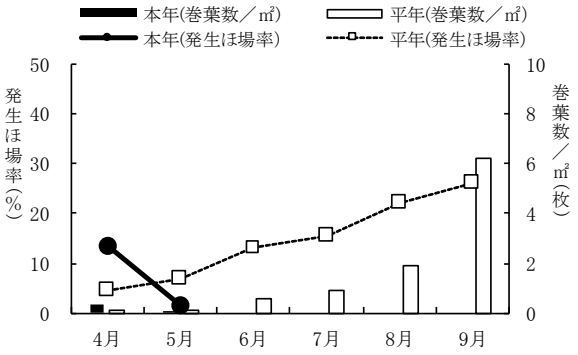
（ア）調査結果　発生量：やや少

発生ほ場率２％（平年７％）

：やや低い（－）

１㎡当り葉巻数0.03枚（平年0.1枚）

：やや少（－）



チャノホソガの発生ほ場率と巻葉数

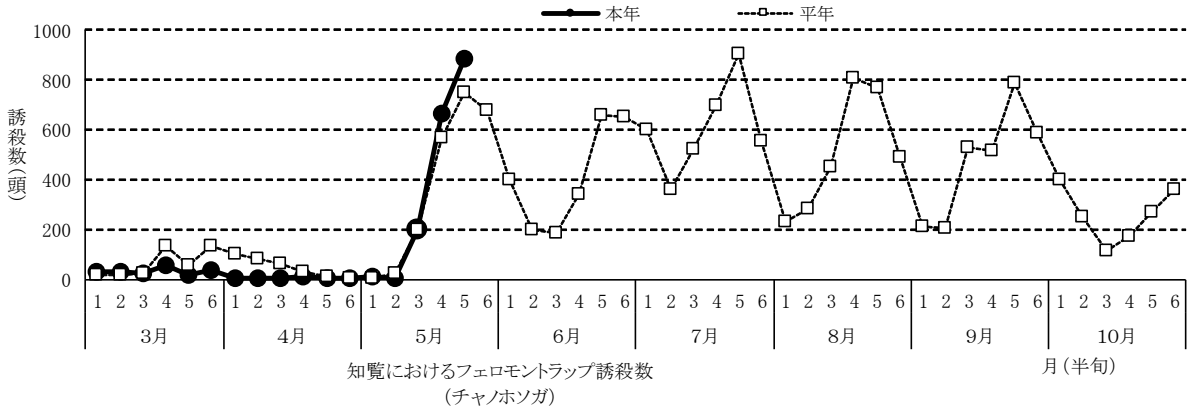
知覧フェロモントラップでの５月（５半旬まで）の誘殺数　1775頭（平年1545頭）

：やや多（＋）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）二・三番茶期は，萌芽～１葉期に防除を行う。

（イ）二・三番茶期は，萌芽から摘採までの期間が短いので，薬剤の使用時期（摘採前日数）に注意する。



知覧におけるフェロモントラップ誘殺数
（チャノホソガ）

（６）チャノミドリヒメヨコバイ，チャノキイロアザミウマ

ア　予報内容

（ア）発生地域　　県本土

（イ）発 生 量　　チャノミドリヒメヨコバイ　　やや多

チャノキイロアザミウマ　　やや少

イ　予報の根拠

（ア）調査結果（５月中旬）

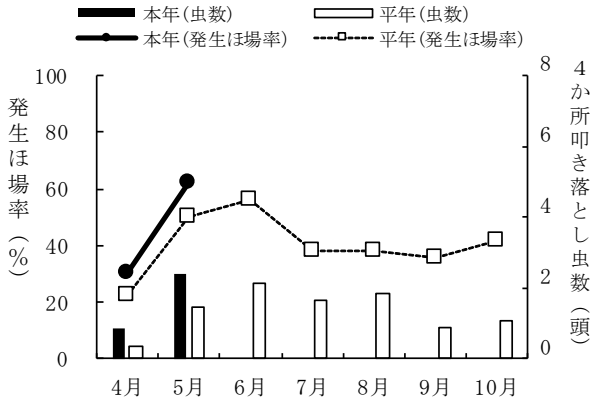
	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
【巡回調査】		
発　生　量	やや多	少
発生ほ場率	62％（平年 50％）：やや高い（＋）	31％（平年 70％）：低い（－）
虫数（４か所叩き落とし）	2.4頭（平年1.5頭）：多（＋）	1.1頭（平年8.5頭）：少（－）

（イ）気象予報

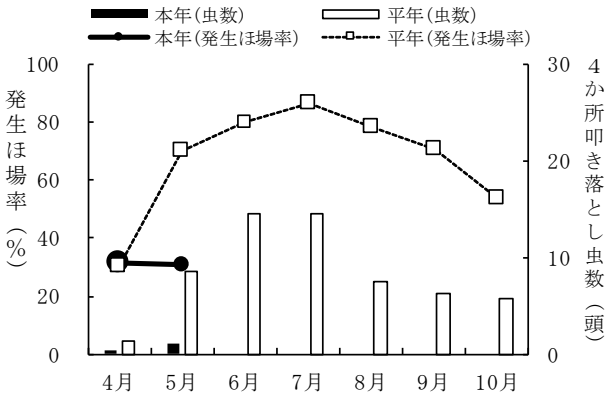
気温：高い（＋）

ウ　防除上注意すべき事項

（ア）新芽を加害するので，二・三番茶萌芽期の防除が必要であるが，摘採後も摘採残葉や遅れ芽を加害し，次茶期の発生源となるため，摘採後の防除も有効である。



チャノミドリヒメヨコバイの発生ほ場率と虫数



チャノキイロアザミウマの発生ほ場率と虫数

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

１．使用前にラベルや説明書をよく読む。

決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り，記載された用途，方法以外では使用しない。

２．使用する農薬にあわせて，適切な防除衣，保護具（マスク・手袋など）を着用する。

３．散布前には防除器具の整備・点検をする。

４．体調がすぐれないときは散布作業を避ける。

５．散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり，流出したりしないよう十分注意する。

６．クロルピクリン剤は，住宅地および畜舎に隣接するほ場や，無風の時，土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。

７．ランネート剤は毒性が強いので，施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。

８．使用期限の切れた農薬，不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。

９．農薬は食品と区別し，鍵をかけて保管する。

10．農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

○調査結果の発生量は，前月の巡回及び定点調査による。
○野菜類共通病害虫の発生量は，各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
○発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は，巡回調査の結果。
○果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は，果樹部と茶業部での調査結果。
○調査結果や気象予報等の末尾の（＋），（－）は，発生量の増加，減少要因を示す。
○気象予報は，向こう１か月の長期予報。
○平年値は原則として過去10年間の平年を用い，本年調査値の後に（平年○○）で表記する。ただし，過去３年間の平均値を用いた場合は（過去３年○○）と表記する。